姪姉妹　～OLの姪姉、女子高生の姪妹との禁姦～

小日向諒

目次

序章　姪姉妹
一章　美姪姉の処女喪失
二章　恋人デートと媚脚遊び
三章　愛姪妹の裏処女破瓜
四章　女子高生メイドの校内奉仕
五章　禁断の愛姦
終章　約束

序章　姪姉妹

脂の焦げる香ばしい匂いが、旬の鰺を載せた矩形のグリルパンから立ち上る。

「うん、いい味だ」

味噌汁の塩加減に満足した天海亮二（あまみりょうじ）は、誰に知られることもなく大仰に自賛した。

グレーのスラックスにワイシャツ姿という、スーツに袖さえ通せばいつでも出勤可能なワークスタイル。その上から、和製エプロンたる割烹着を着込んだ三十二歳の壮年男の風貌は、客観的に見れば何ともアンバランスで奇妙なものだ。

もっとも、世間一般の常識はとにかくとして、天海家のローカルルールに照らし合わせれば、早朝のキッチンで見られるこの光景は何ら不思議なものではない。十年以上も繰り返されてきた調理風景は、今ではすっかり日常の画（え）となっていた。

「おはよ〜……ふぁ……」
ほどよく皮の焦げた鰺の塩焼きを角皿に移す。良いタイミングで微睡みが含まれた挨拶が食卓から響いてきた。
「おはよう。涼香」
声を掛けてきた人物を見ることなく、亮二はあくび混じりの声へ淡泊に応じる。
厨房の煙を屋外へと叩き出す換気扇の轟音に紛れているものの、長年慣れ親しんだ姪姉の声を間違えるはずも無い。
「コイツを持って行ってくれ。俺は大根をすり下ろさなきゃならん」
食卓に背を向けつつ、芳醇な香りが立ち上る角皿をキッチンの隅に置く。
「はーい」と伸びた声に混じって、ペタンペタンとスリッパの足音が近づいて来た。
「あぁ、それとついでに箸も持って行って――」
冷蔵庫から使いかけの大根を手に取り、鬆が立っていないかチェックしていた亮二は、キッチンに入ってきた姪姉を見て、思わず目を剥いた。
「……あのなぁ、涼香」
数秒の沈黙の中にたっぷりと小言を詰める。
驚きのあまり、危うく滑落させそうになった大根を濡れた俎板の上に転がした。

「うん？　なぁに、兄さん」
焼き魚の載った皿をのっそりと手にした涼香は、寝ぼけ眼を擦りながら小首を傾げた。その無防備な仕草は、持ち前の美貌も相まって姪姉ながら絵になる。
しかし、ナイトガウンを羽織ってショーツを穿いただけという、ラフの定義を大きく逸脱した姿は保護者として静観はできない。
「お前な……何て格好しているんだ」
ボタンが一つも掛けられていない開けたガウンからは、白い肌に覆われた鎖骨が横顔を覗かせていた。細い臍は涼しげに腹部へ線を引いている。
豊かな胸は、双乳の頂きに添えられた突起をうっすらと透けさせていた。肩から腹部に沿うガウンを乳肉が浮かし、呼吸に合わせてふわふわと揺らめく。
「しかもノーブラで……おい、ショーツくらい隠してくれ」
下腹部には、人目に触れさせないはずのパールピンクのレースショーツが赤裸々に晒されていた。家族とは言え、仮にも男である亮二としては実に目の遣り場に困る。
「だってぇ、最近暑いんだもん」
それについては同意するのも吝かではない。初夏とは思えない猛暑の日々が続いているのだ。亮二も燦然と輝く太陽に文句の一つも吐きたくなる。

だが、暑ければ脱げばいいという野蛮な発想に、拍手を送るつもりは毛頭無い。
「どこの裸族の生まれだお前は。言っておくが、姉さんは語るまでも無いとして、義兄さんは俺から見ても立派な紳士、かつ、まともな文明人だったぞ」
「んもぅ、自分の家なんだからいいじゃない――それに……」
「ふふふ」と、涼香が含みのある小悪魔的な笑みを浮かべる。
黒曜石に酷似した姪姉の瞳に茶目っ気が宿った。
「朝からこんな眼福にあずかれるなら、兄さんも良い気分でしょ？」
涼香の腕が内側に折り曲げられる。美しい乳丘が盛り上がり、深く柔らかな渓谷が胸に生み出された。微かに内股に膝を崩した涼香は、男の視線を釘付けにするしなを作り、眩しいばかりのウインクを投げかける。
片手にこんがりと焼けた鰺さえ掲げていなければ、グラビアのスナップショットとしても通用する魅惑的な構図だった。
「どう、兄さん。こういうセクシーな格好、ドキドキする？」
この十二年間は恋人も作らず、未だ結婚の兆しの無い独身生活を貫いている亮二であったが、健全な男であることに変わりはない。
仮に、テレビで見かける好きなタレントや女優が、寸分違わぬ格好で誘惑してきた

ら、誘蛾灯に群がる羽虫の如くフラフラと引き寄せられていただろう。
「馬鹿言うな。お前のつまらん身体なんか見て、誰が興奮なんぞするか」
「な……なんですってっ」
だが、眼前の女の子は十二年以上一緒に暮らし、二十二年前に生まれた頃から知っている、姪姉妹の片割れだ。
「あのなぁ、俺は姉さんに代わって、お前のおしめだって替えていたんだぞ。風呂だって何度一緒に入ったと思っている。俺の寝床に繰り返し潜り込んできて、翌朝寝具一式をずぶ濡れにしてわんわん泣いていたお漏らしっ子に……何で興奮するんだ？」
亮二は嘆息しながら涼香の見解に反駁する。ついでに、記憶の彼方に封じられたであろう、在りし日の恥を白日の下に晒すと、姪の気勢は急激に萎む。
「う、うぅ……ず、ずるいっ……そんな昔のことを引き合いに出すなんてっ」
、代わって羞恥が湧出したらしく、涼香の秀麗な顔が真紅に染め上げられていく。
「あ、良い匂い。今日は鰺の炙り物なんですね」
全身から恥辱の湯気を立ち上らせ、肩で息をしている涼香の後ろから、もう一人の同居人が食卓へと降りてきた。
「やぁ、沙羅（サラ）。おはよう」

「おはようございます、叔父様。何か、サラにも手伝えることが――」
風鈴の音を彷彿とさせる澄んだ声が、裸同然の姪姉を見るや否や凍りつく。
「うぅーっ、聞いてよ沙羅ぁ。兄さんがイジワルするの。私のこの格好見て、露出狂の痴女って言うんだよ。酷いよね暴言だよね。お姉ちゃん、可哀想だよね」
「こらこら、さり気なく話しを捏造するな」
もっとも、事実が歪曲されていなくても、現実にはあながち間違いでもない。
「あ――当たり前ですっ。なんて格好しているのお姉ちゃんっ」
一瞬の空白の後、姪姉の痴態に直面した姪妹(めい)が、琥珀色の瞳を見開きながら一喝した。
「何よぅ、沙羅まで。暑いんだし、別に薄着でもいいじゃない」
「これは薄着って言いませんっ。ほぼ裸っていうんですっ」
非常識な姉と違い、一般常識をつつがなく身につけた妹は、ナイトガウンの袖を無理矢理牽引し、亮二の前から悩みの種を排除していく。
「ごめんなさい叔父様っ。すぐに、お姉ちゃんを着替えさせますからっ」
「あんっ、やめっ、引っ張ら……もぅ、離してよ沙羅ぁ」
文句とも抗議とも取れる戯れ言を垂れ流していた涼香だが、有能な妹は一切の発言

を無視し、問答無用でキッチンから食卓へ。そして自室に続く廊下へと、困った姉を連行していった。
(やれやれ……同じ両親から生まれたのに、外見も中身も姉妹とは思えないな)
平日の早朝から一波乱が巻き起こったキッチンに、鍋の蓋がカタカタと揺れる音だけが戻る。
そんな朝の小事の隅では、グラグラに煮立った味噌汁が、具である木綿豆腐を無残にも肥大させていた。

コトン――。
新聞の向こうから聞こえた硬い音に反応し、亮二は目線を上げた。
「叔父様。どうぞ」
食後のお茶を煎れてくれた沙羅が、丸盆を胸に抱きながらにこりと微笑む。
「あぁ。ありがとう、沙羅」
常滑焼きの湯飲みを手にし、ズズッと音を立てて翠色の水面を口に含む。
まだ少し魚の脂っぽさが残っていた喉が熱い煎茶によって洗い流され、温かな清涼

感が胃に染み渡っていく。
「……ん？　何だか、いつもの茶と比べて、ちょっと香りが違わないか？」
「えっと、駅ビルのお茶屋さんが、新しい茶葉をお勧めしてくれたんです。値段も手頃でしたし、香りも良かったので試しに買ってみたんですが……あの、美味しくありませんでしたか？」
「いや、その逆だ。香り高くて、とても美味しいよ」
天海家の厨房を主に担っている亮二だが、こと、茶葉の選定に関しては年若い姪妹に専任していた。
沙羅は家族の中で一番嗅覚が鋭い。その昔、食卓に漂ってくる匂いだけですべての献立を言い当てた実績すらある。
そんな少女の選定眼ならぬ選定鼻には、亮二も全面的な信頼を寄せていた。
「良かった……叔父様に喜んで頂けて、嬉しいです」
幼い顔を綻ばせながら、対面のソファーに小さな体躯を沈ませる。沙羅は牛乳が入ったマグカップを持ち上げ、コクンコクンと微かに喉を鳴らした。
窓から差し込む初夏の朝日が、天然の亜麻色（フラクスン）の髪を洗う。
柔らかく暖かな髪色と幼い外観も相まって、姪妹は妖精さながらの可愛らしさを醸

し出していた。
「そうか……沙羅のところは、今日から衣替えか」
清潔な白いブラウスのみを着ている沙羅を見て、遅ればせながら姪妹の服装の変化に気付く。
「あ、はい。でも、サラの場合は上着を脱ぐだけですから、あまり代わり映えはしませんけれど……」
琥珀色の双眸に、少しだけ寂しげな光が宿る。父の特色が色濃く反映された姪妹の肌は、処女雪に匹敵するほどに白く美しいものの、反面、強い日差しには極端に弱い。
下手をすると、日焼けを通り越していきなり火傷を負ってしまうこともある。
そのため、沙羅だけは特例的に、衣替えをしても冬場と同じ長袖のブラウスを着ることが学校より許可されている。
ついでに言うと、そんな体質のため、多くの女子校生が街中で見せつけるように生足を晒す中、脚の大部分を隠す白いサイハイソックスを常用していた。
（皆と一緒の服装ができないから、残念なんだろうな）
純白の素肌はよく同性から羨ましがられると聞くが、友人達と同じ服を着て過ごせないことに、年頃の少女は少なからず不満があるようだ。

「沙羅、ちょっと立ってくれないか？」
「えっ？　は、はい」
亮二の唐突な頼みにも姪妹は素直に応じ、マグカップを置いてふわりと腰を上げる。
「手をこう、水平に伸ばしてから、クルッと身体を一回転させてみてくれ」
「えっと、こうですか？」
細く小さな腕がスッと伸ばされ、軽やかに少女の身体が円を描く。
ネイビーブルーのプリーツスカートが風を孕んで浮かび上がり、亜麻色の髪が緩やかな弧を描く。真紅のコードタイが小さく跳ね、ブラウスの襟元に彩りのアクセントを加えた。胸ポケットに縫い付けられた金糸の校章が、沙羅が名門で知られる慶徳女子高等学院の在校生であることを示している。
「うん、やっぱり、沙羅は長袖の方が似合うな」
「え……ほ、本当ですか？　叔父様」
薄曇りだった沙羅の表情に、ほのかな日射しが差し込む。
「あぁ、そっちの方が淑やかな感じだし、何より可愛らしい」
亮二が率直に褒めると、沙羅は俯きながらみるみる頬を朱に染めていく。
なまじ肌が透明感溢れるため、その変化の度合いは劇的だ。

「ぶーぶーっ。差別だー差別だーっ。姉妹差別だーっ」
いつの間に立っていたのか。愛らしく素直な姪妹を亮二が愛でていると、リビングの入り口から露骨に唇を尖らせた姪姉がブーイングを投じてくる。
「何よぅ、兄さんのバカ。私には可愛いって言ってくれなかったくせにぃ」
「当たり前だ。市民の血税で飯を喰っている公僕が、国語力を疑われる台詞をおいそれと口にできるか」
少なくとも、何にでも「可愛い」とつける、昨今のティーンエイジャーの言語感覚には到底ついて行けない。女子高生間で使われる流行語などに至っては、年々亮二の常識を苦悩させる。これは決して世代格差ではない――と、亮二は思う。
「で、でも、スーツスタイルのお姉ちゃんは、とても綺麗で格好いいです」
亮二と涼香の言い争いを仲裁する形で、沙羅が慌てて波の立たないフォローを行う。
（まぁ、沙羅の言うとおりではあるんだよな）
身長が高くスタイルが抜群によい涼香は、タイトな服装が殊更に良く似合う。画一的になりがちなスーツも、涼香が着ると誂えられたように見栄えする。就活でリクルートスーツを着ていた時など、大学生とは思えない見事な着こなしをしていたものだ。
「ふっふーん。そーでしょー。沙羅は兄さんと違って見る目があるね」

涼香が自慢げに胸を張ると、ふくよかな膨らみがジャケットから覗くブラウスを大きく盛り上げる。くびれた腰と大きく丸みを帯びた臀部によって、きつそうなタイトスカートがはち切れそうだ。
スリットから覗くナチュラルな色合いのストッキングは、緩急のつけられたふともともとふくらはぎを包み込み、見事な美脚を演出している。
「それにしても、最近特に出勤が早いな。新人社員だからって頑張るのはいいが、無理は絶対にするなよ。もし、お前の身に何かあったら――」
「はいはい。わかってるよ。ママに合わせる顔が無いんでしょ？」
涼香はひらひらと手を振り、亮二の定型句とも言うべき台詞をいなすと「さぁてと」と両の拳を握り締めながら奮起する。
「今日も猫の皮を何枚も被って仕事してくるね。いってきまーす！」
お世辞にも、諸手を挙げて賛同できるとは言い難い抱負である。
天を仰ぐ亮二をよそに、天海家のムードメーカーは今日も元気よく出勤していった。
「……アイツは、五月病で悩む新人の心境なんて、絶対に解らないだろうなぁ」
二十二年間長女をやっているクセに、長女らしい落ち着きがまるで見られない新社会人だ。亮二が頭を抱えると、女子高生の次女が可笑しげに口元を押さえる。

「でも、お姉ちゃんの笑顔を見てると、とっても元気になりませんか？」
飄然とした姪姉を心から尊敬している姪妹は、同調を求めて叔父を見つめる。
「まぁ、それについては一理あるんだが……」
偶には淑やかで落ち着きのある姪妹を見習って欲しい――とは思うものの、まさしく沙羅の言うとおりであり、保護者である亮二としては苦笑するしかなかった

「叔父様。ありがとうございます」
助手席から降りた沙羅は、ドアを閉めた後に姿勢を整え懇切丁寧に頭を垂れる。
分度器をあてれば正確に３０度の傾斜角を維持しているであろう、優雅な礼だ。
（涼香も伝統ある女子高校に通えば、こんな風になって――いるわけないな）
栄えある名門校の制服を翻しつつ、遅刻を免れるために全力疾走する涼香のイメージが、即座に空虚な願望を打ち消す。
電車通学の沙羅を最寄りの駅まで送り届けると、亮二は小さく手を振ってアクセルを踏み込み、駅のロータリーから抜け出した。
（沙羅は沙羅で、もう少し砕けても良いと思うんだがなぁ）

亮二と十歳違いの涼香は、昔から親しみを込めて「兄さん」と呼んでくるが、沙羅は一歩距離を置いて「叔父様」と慕ってくる。同じ姪姉妹なのに違いは顕著だ。
性格も容姿も全然似ていないのに、それでいて仲はとても良いのだから面白い。
（ま、二人が幸せに育ってくれれば、俺は何でもいいんだが――っと）
不意に変わった信号に合わせて、少し強めにブレーキを踏み込む。
横断歩道の見える最前列で愛車が停止した。数秒をおいてから赤信号に堰き止められていた人々が、フロントウインドウの向こうで立体の川を作り始める。
ハンカチ片手に額の汗を拭くサラリーマン。スマートフォンを弄くりながら器用に人波を縫う女子高生。友人と談笑しながら通り過ぎる男子中学生――。
そんな、どこでも見られる光景の中に、一つだけ亮二の目を引く者達がいた。
（高校生と……小学生かな）
一人の女子高生が、通学帽を被った幼い男の子の手を引いている。
見たところ、二人は姉弟らしい。少し過保護な姉が、可愛い弟と一緒に通学している――そんな状況を容易に把握できる光景だ。
（少し歳の離れた姉弟……か）
人波の奥に消えていく姉弟の後ろ姿を視線で追いながら、俺と姉さんもあんな感じ

だったなと、亮二はぼんやりと思い出した。

早くから両親を亡くしていた亮二にとって、年の離れた姉、天海夏美は親同然の肉親であった。
優しくも厳しく、そして美しかった姉――。
そんな夏美から結婚すると伝えられた時、当時十歳だった亮二は驚くと共に心から祝福を送った。正直に言えば、姉が自分から離れていったという喪失感もあったが、苦労していた姉が新しい幸せを掴んだことが、子供心にとても嬉しかった。
（初めて義兄さんと会った時は、たまげたなぁ）
姉の夫となる男と顔合わせした際、馴染みの無い目と髪の色に吃驚したものだ。
けれども、亮二を実の弟と変わらぬ扱いをする、陽気で逞しい男を尊敬するのに、それほど時間を要しなかった。
だが、姉の結婚によって一番の転機となったのは、亮二に姪ができたことだろう。
結婚したその年に生まれた涼香。それから五年後に誕生した沙羅は、これまで庇護されるだけだった亮二の意識を一変させた。

幼く儚げな姪達が、年若い叔父である亮二をまるで兄のように慕ってくる――。
厚い信頼を無条件に寄せてくる姪達を、亮二もまた妹同然に接し、愛情を注いだ。
凶報は、突然だった。
結婚十周年の記念として海外旅行に出かけていた姉夫婦が、飛行機事故で客死したのだ。後に残ったのは航空会社から支払われた莫大な賠償金と、残された二人の姪姉妹のみ。
大好きな両親が亡くなったと聞かされ、泣き崩れる姉の涼香――。
そして、まだ死の概念すら理解できず、困惑することしかできない妹の沙羅――。
(姉さんと義兄さんは俺を育ててくれた。今度は、俺が姪たちを護る番だ)
姪姉妹の扶養と引き替えに、亮二の将来設計は大幅な変更を余儀なくされた。
就職先として定めていた民間企業は、定時勤務の厳密な地方公務員に変わった。
当時付き合っていた彼女は、共に過ごす時間が激減するにつれて、自然に関係は消滅していった。遊び仲間だった大学の友人達も、付き合いが疎遠になるに連れて離れていき、古くからの旧友数人だけが残った。
それを悔やんだことや惜しいと思ったことは、ただの一度も無い。
亡き姉夫婦の代わりに、姪たちを幸せにすることこそが亮二のすべてであり、彼女

達が幸せになるためなら、どんな労苦も厭わなかった。
「おっと、いかん」
クラクションを鳴らされ、信号がいつの間にか青になっていることに気付く。
(姉さん。涼香と沙羅は、今日も元気に笑っていたよ)
亮二はハザードを短く点灯させて後続車に謝罪すると、ステアリングを握る指に力を込めてアクセルを踏んだ。

一章　美姪姉の処女喪失

「はぁ……疲れたぁ……」

後三十分ほどで日付が変わろうとする同窓会の帰り道。夜陰が幾重にも厚みを深め、ローヒールパンプスの靴音だけがブロックタイルから爪弾かれる、静寂に満ちた帰路の最中――。

雲一つない深夜の空に向かって、涼香は酒気混じりの息を「ふぅ」と吐いた。

（いつものことだけど、やっぱりお酒の席は馴染めないなぁ……）

酒も料理も美味しかったのに、気付けば溜息が紡ぎ出され肩が落ちる。ストレス発散が目的なのに、参加したことでストレスが溜まってしまっては本末転倒だと思う。

（今度はお誘いがあっても……理由付けて断ろっかな）

涼香は酒が嫌いなわけではない。どのような酒も大概口にできるし、中でも甘いカクテルやリキュールはその飲み易さもあって好く口にする。

飲み屋でしか口にできない独特のメニューは食欲をそそり、店内の笑声がＢＧＭとなって反響する明るい雰囲気も大好きだ。

静かなバーの方が洒落ているとは思うが、居酒屋みたいにワイワイと騒がしい店の方が性に合っている。

（彼氏――かぁ）

ただ、皆が恋愛談議に華開くと涼香の酔いは一気に冷め、自分だけが仲間外れだと思い知らされる。笑談の場を壊さないため、本心を押し込めて友人相手に何枚も何枚も猫を被るのは、仕事でかかる重圧の比ではなかった。

（あぁもう、ヤダヤダ……これってみんなへの嫉妬だよ）

恋愛の成功譚や失敗談、片想いから彼氏彼女自慢といった良くある話題に、一度は自分も思いっきり参加してみたい。どんな下らないことでも良いから、自分の好きな人を話の肴にして、友人達と恋話を楽しんでみたかった。

（でも……私には、無理なんだよね）

そう――そんな何気ない会話にすら、涼香は参入できない。

好きな人はいる。
涼香には、ずっと昔から想い続け、顔を見るだけで一日の元気が出る異性がいた。
なのに、自分の胸を苦しめるその思い人の名は、誰にも教えることはできない。
（兄さん……亮二……兄さん……）
決して恋心を抱いてはならない叔父の姿を、脳裏に思い浮かべる。それだけで、涼香の胸に締め付けられる疼痛と、甘酸っぱい痺れが湧き上がる。
（いつから、兄さんを男性として見ていたのかな）
夜空に浮かぶ月を見上げながら、涼香は自らの過去へと問いかける。
小さい頃から、亮二が大好きだった。年の若い叔父はいつも涼香と一緒に遊んでくれた。何でもこなせる亮二には、性差を超えた純粋な憧れを抱いていたものだ。
（でも、あの時から――）
父と母が不慮の事故で亡くなった、あの時から――叔父へと向ける好意は姪としてのものではなく、一人の女のものとして移り変わっていったのだと思う。
（私が泣きじゃくっていた時も、兄さんは決して弱音を吐かなかった）
夏美が、叔父にとって母の代わりでもあったことは知っていた。母であり姉である肉親と、尊敬していた義兄を一度に失った亮二の悲しみは、涼香には計り知れない。

それなのに、訃報を告げられた時も、亮二は姉妹の前で一度も涙を見せなかった。
気丈な顔の裡で、叔父はどれだけ拳を握り締めて泣いていたことだろう。
弱音を見せなかっただけではない。亮二は唐突に孤児となってしまった涼香と沙羅を後見人として引き受け、両親以上に愛情を注いで育ててくれた。
（もう少し、兄さんが駄目な男なら良かったのに……）
そうすれば、こんな切ない思いをせずとも済んだろう。
叔父はあまりにも理想的な男性像を、涼香の前で描き続けた。亮二は優しくもあり厳しくもあり、保護者の立場や年齢を笠に着た暴論や、空虚な倫理や持論を述べたことはただの一度も無い。姉妹を庇護しながら、叔父の視線は常に二人と対等だった。
今思えば、このおよそ親らしくない子育ての姿勢が、叔父を男として見てしまう契機だったのかも知れない。
（ホント、格好良いところしか、私に見せてくれないんだから）
顔も見た覚えがない親戚が、賠償金目当てに姉妹を引き取ろうと持ちかけてきた際、亮二の鉄拳によって宙を跳んだ瞬間を、今でも涼香は鮮明に覚えている。
そんな人の悪意を引き寄せる遺産が、知らない間に開設されていた自分の銀行口座に、定期預金として組み込まれていると知ったのは成人式の夜だ。

今でこそ亮二は昇進し、そして涼香自身が働き始めたこともあって天海家の蓄財は随分と潤ってきたが、両親を亡くし叔父と暮らし始めた頃は、家族全員で節制を心がけていた。

大黒柱たる亮二が地方公務員ということもあり、天海家が衣食住に困ったことは一度も無い。

しかし、当時の涼香と沙羅は揃って成長期だった。おまけに、何かと物入りな女の子だけあって、殊更生活に余裕があったわけでもない。

それを理解してたからこそ、涼香は成績こそ今一つだったが公立校への進学を貫いた。沙羅が格式に比例して学費も高い名門私学に通っているのも、特待生として免除を受けている要因が大きい。

桁違いの預金額を見て唖然とした後、涼香は「どうして今まで手をつけなかったの」と、叔父を問い詰めた。

無自覚な金食い虫だった姉妹に相反し、叔父が私事に金を費やす光景は終ぞみたことがない。長きに渡った断酒が解禁されたのも、涼香が成人してからのことだ。

これだけのお金があれば、姉妹を養うのに亮二が苦心することは無かった――だからこそ、猛然と噛み付いた。

『この金は姉さんと義兄さんの命だ。子供のお前以外、触れる資格があるか』

そんな涼香の激昂を叔父はさらりといなし「それに」と続けた。

『俺は、お前達と一緒に過ごしてきて、苦しいと感じた時は一度も無いよ』

あの時の叔父の優しげな声――そして、温もりに満ちた穏やかな微笑みは、生涯忘れることはないだろう。

（はぁ……何で兄さんって、あんな人が良いのかな）

叔父が、自分たち姉妹に配慮して、結婚はおろか恋人すら作ろうとしていないことには気付いている。恐らく、涼香と沙羅が自立し、仮親としての責を果たした後、悠々と新しい家庭を築く予定なのだろう。

男性として魅力溢れる叔父だ。恋人なんて、本人がその気になればすぐ作れるに違いない。

（どんなに頑張っても……私は、兄さんの恋人にはなれない……）

叔父と姪との関係は、とても強い絆で結ばれている。

皮肉なことに、その堅強さは、そのまま両者を断絶する壁の高さに比例していた。

これだけ近くで愛しているのに、ただ叔父と姪の血縁であるために結ばれない――。

改めて突きつけられた非情な現実に瞳が潤み、思わず涙が溢れそうになる。

（兄さんが素敵なのが悪いんだからね。バカ）
気付けば、帰るべき家が目の前にあった。カーテンで閉ざされたリビングからは、薄明かりが漏れている。どうやら、まだ亮二は起きているらしい。
（さぁ、泣くのはもうお終いっと。兄さんの前では笑っていなくちゃね。天海涼香は、兄さん自慢の明るくて良い子なんだから）
門の前で涙を拭い、弱音を追い出すために軽く頬を叩く。
無様に泣き崩れた顔など、大好きな叔父には絶対に見せたくなかった。
月光の恵みを借り、手鏡で自分の笑顔を確認すると、涼香は精一杯明るい声で「ただいまぁ」と扉を開いた。

「兄さぁん、まだ起き――ど、どうしたの？」
深夜に帰宅した姪が、リビングに入ってくるなり驚きに声を上擦らせる。
無理もない。朝見た時と代わらないシャツとスラックスを着たまま、こんな所に座っていれば目を丸くしない方がどうかしている。
おまけに、解いたネクタイはソファーの上でとぐろを巻き、テーブルにはリキュー

ルの瓶が置かれているのだ。
普段ならこんな自堕落な姿は、絶対に姪達には晒さないだろう。
「いや、何。今日はちょっと課長に捕まってさ。タダ酒御馳走になる代わりに、散々家庭における不満事を聞かされてきたんだよ」
しかし、幾ら旨い酒を飲んでも肴の会話が会話だ。お世辞にも気持ち良く酔えるものではない。そこで、帰宅してから飲み直し始めたところ、タイミング悪く涼香が帰ったというわけだ。
「ま、課長には世話になっているからな。愚痴を拝聴するのも部下の仕事さ」
「はぁ。宮仕えは大変だね」
涼香は肩にかけていたバッグをテーブルに置き、亮二の隣に腰を下ろす。ソファーが浅く沈み込み、フレグランスの優しい芳香が鼻先を擽った。
タイトスカートに引かれた深いスリットから、シルクベージュのパンティストッキングに覆われた艶やかなふとももが剥き出しとなる。
（姪とはいえ、目の遣り場に困るんだがなぁ）
そんな亮二の心境を知らずに微笑む涼香が、リキュールの瓶を小さく掲げる。
「はい、気分転換にどうぞ」

「ん……すまないな」
少し迷ったが、涼香の好意を素直に受けた。
グラスに注がれた苺の果実酒を一口含む。姪という色眼鏡を抜きにしても、酌をしてくれたのが美人だったためか。さっきより、酒の味わいが増した気がした。
「なんか美味しそう。ねぇ、兄さん。私も一緒に飲んでいい？」
「構わないが、涼香も外で飲んで来たんだろう？　飲み過ぎは身体に毒だぞ」
「あら、兄さん。私が鏡に見えるくらい酔っているの？」
ふわりと席を立った涼香が、クスクスと笑いながらグラスを取りにキッチンへ向かう。残念ながら、これは涼香の言い分が圧倒的に正しい。姪が戻ってくると亮二は飲み手から酌係に転向することで、自分の非を素直に認めた。
「うん……美味しい」
グラスに少量注がれたリキュールを飲み干すと、涼香は満足げに頬を緩ませる。
空になったグラスに再び紅色の酒精を足すと、亮二も自分の分を注ぐ。
（いつか、家族全員で一緒に飲んでみたいが……この時間だと無理かな）
この場にいない沙羅は、模範的な学生ということもあって就寝時間が大変早い。
それこそ、夜十一時には夢路を辿っている。深夜の酌み交わしは、成人したとして

も実現が難しそうだ。
「そうそう、今日行った同窓会なんだけれどね――」
酒の肴とばかりに涼香が口を開き始める。
（やっぱり、涼香は綺麗だな）
適当な相槌を打ちながら、亮二は久々にゆっくりと姪を眺めた。
身内贔屓を抜きにしても、涼香はとても美人である。
海に行けば成熟した肢体で男達の視線を釘付けにするし、ファッションセンスも上々だ。性格も明るくさばけており、会話も上手なため話がとても盛り上がる。
（にもかかわらず、どうして彼氏の一人も連れてこないんだかなぁ）
涼香にとって男など選り取り見取りだろう。
それなのに、羨望の視線を受ける身でありながら、二十二年間にわたって初恋の兆しすら見えない。これは、叔父としては少々気がかりだった。
涼香に限って無いとは思うが、万が一にも結婚適齢期を超え、いかず後家になったりしたら亡き姉夫婦に申しわけが立たない。
雲の上にいる二人は亮二を親馬鹿と笑っているかも知れないが――。
「なぁ、涼香に好きな男はいないのか？」

ちょうど会話が途切れたタイミングを見計らって話題を振ってみる。
この種の話を亮二から尋ねたことは一度もない。幾ら育ての親とはいえ、姪の色恋沙汰に面白半分に口を挟むのは、いささか無粋だと考えていたからだ。
「えっ……」
だから、涼香の意外そうな反応も、ある程度なら予想できていた。
「……兄さん。どうして、そんなこと訊くの？」
殊更、叔父として不自然な問いかけでは無かったと思う。
なのに、楽しげに話していた涼香から、潮が引くように笑みが消えた。
「あぁ、いや……」
躍動感のある声が、湖畔の水面さながらに静まりかえる。
その激変した態度に当惑し、次の言葉が咄嗟に出てこなかった。
「いや……別に深い意味は無い。ただ、何となくさ」
まさか本音を話すわけにも行かなかったので、曖昧に言葉を濁す。
（ミスったな）
いくら亮二が微酔い状態であろうとも、自分の発言が涼香の禁止領域に踏み込んでしまったことは明白だった。まさか、こんな何気無い会話で地雷を踏んでしまうとは

思わなかったため、とっさに話の流れを変えることができない。
「……うん。いるよ」
数秒ほど続いた沈黙は、意外なことに涼香自身が破った。
「片想い……なんだけれどね」
「……そうか」
少し、安心した。どうやら亮二が抱いていた懸念は、単なる杞憂に終わったようだ。
ただ、好きな男がいるとわかり、叔父としては一抹の寂しさもあったが――。
（片想い、か。ちょっと意外だな）
涼香の溌剌とした性格からは、どうも想像がつかない。
姪は、恋愛を成就させるためなら、もっとアクティブに攻めている印象がある。
「その人、私のことなんて眼中に無いんだけれどね……その、私が、一生懸命『好きだよ』ってアピールしても、全然気付いてくれないし……」
グラスに残ったリキュールが揺れる。寂しげな微笑みが、整った顔立ちに哀愁を差し込ませた。毎日爽やかな笑顔を絶やさない姪だけに、覗いた陰はとても痛ましい。
（涼香でも……こんな顔をするんだな）
今まで見たことの無い、儚げな表情だった。

もう、この件について深く追及しない方が良いのかもしれない。だが、雨に打たれた子猫のように悄然とした姿を見せられると、叔父として何とかしてやりたかった。
「……まぁ、男は総じて鈍いもんだ。『好き』――って合図を送るより、どうせなら玉砕覚悟ではっきり告白したほうがいい。気付かないまま相手が彼女でも作ったりしたら、やりきれないだろう？」
亮二の提言は、取り立てて目新しさのない無難なものだ。
なのに、涼香はまるで天啓を得たと言わんばかりに大きく目を見開く。
「……告白、したほうがいいのかな」
ポツリと、小さく涼香が唇を開く。
「『リョウ。恋愛ほど易しいギャンブルはナイ。何せ、フられても幾らでも再戦のチャンスがあるんダ。こんな分の良いレートは、他のどんな賭け事だって成立しナイ』
突然口調の変わった亮二に当惑したのだろう。涼香が大きく目を瞬かせる。
「――と、遥か前、初恋に悩んでいた意気地無しのガキンチョに、あるカッコイイ男が助言してくれたんだが……涼香は、これをどう思う？」
普通の日本語とは微妙にイントネーションが異なる話し方をし、なおかつ亮二を渾名で呼ぶ人間は、涼香の知る限り一人しかいない。

「そっか……そうだよね」
しばらく後、心の中で納得の行く答えが出たのか、涼香がふわりと顔を上げる。
「こんな易しい勝負で……怖じ気づいていちゃダメだよね」
何か、迷いが吹っ切れたのだろう。涼香の表情に柔らかな笑顔が甦った。
「ありがとう、兄さん。私、パパの言葉を信じて頑張ってみるよ」
良い笑顔だ――そう、亮二は思う。自分の姪は、胸を張って自慢できる女の子だ。
悔しいが、彼女の心を射止めた男は最高の果報者に違いない。
（あぁ、なるほど……俺は父親じゃないが『貴様みたいな若造に、俺の娘をやれるかっ』――って、ブチ切れる、全国の親父さん達の気持ちがわかった気がする）
もし、涼香が自分の前に男を連れてきたら、胃に穴が空くほどの圧迫面談をして迎えてやろうと、亮二は固く心に誓う。
「ね、兄さん」
ボンヤリとした心の裡で、姪の未来の彼氏に対して邪悪な画策をしていると、いつの間にか立ち上がっていた涼香が目の前にいた。
「うん？　どうし――」
疑問を口にするよりも早く細い指が両頬に添えられ、柔らかな唇が亮二の言葉を塞

いだ。

ロマンティックなキスの方法――なんて特集を、いつか女性誌で見たことがある。
バードキスからフレンチキス――そして、ファーストキスに至るまで、自分の魅力を伝えるキスの仕方について、ちょっとドキドキしながら読んでいたものだ。
けれど、そんなハウツーは、生まれて初めてのキスの感動の前には何の役にも立たなかった。
（あぁ……私、兄さんとキスしてるんだ）
何度も、夢の中で叔父と口付けを交わしていた。誰にも話せない恥ずかしい思い出だが、数年前までは時折枕を亮二に見立ててキスの練習をしたこともある。
想像の中で何百を超えるキスをしていた。しかし、たった一度のリアルなキスは、涼香の予感を軽く超えた衝撃を全身に走らせる。
（これが、兄さんの唇……兄さんとのキス……）
唇の間を縫って染み渡る、思い人の味。
（兄さん……これが私の気持ちなの……私、頑張って伝えてみたよ）

瞳を閉じ、言葉を断ち、誰もが知る思慕のカタチを大好きな叔父に伝える。
百を超える言葉より、千を超える花束より、たった一つで告白できる恋の作法だ。
「ん……クチュ……は、ぁ……」
数十秒に渡ったキスが終わり、潤んだ瞼を開き身体を離す。
（やっぱり……兄さんは鈍感だよ）
亮二の目は大きく見開かれ、ソファーの背もたれに指先を食い込ませている。
恐らく、立っていたら膝を崩し、背中から倒れ込んでいただろう。叔父がここまで狼狽したのは初めて見た。
唇へ付着したルージュにも気付いておらず、瞬きする彫像と化している。
（好きだって、全然気付いていないんだから……ホントに鈍感だよ）
それでも、亮二が大好きだ。叔父になら、何だってしてあげたい。
好きな男になら、すべてを捨ててもいい――そう、涼香は決意した。
（だから、私はキスをしたんだよ……兄さん）
涼香はジッと亮二を見つめ、静かに息を吸う。
「私……兄さんが……好き……」
姪としての好意ではない。

キスと告白で、鈍感な叔父に女としての想いを打ち明ける。
「涼香……」
亮二は、一度口を開いて何かを言おうとしたが、すぐに俯いて眉間を摘んだ。
閉じられた瞳には、今まで見たこともない苦悩が刻まれている。
(私、本当にバカな子だよね……大好きな人を、こんなに苦しめて……)
自分の恋は禁じられた想いだ。誰にも祝福はされないし、誰にも認められ無い。
(私も……それに、兄さんだってわかってる)
涼香がそんな自明の事実に気付いていないとは、叔父も考えていないだろう。
この恋心は、曇りのない純愛だ。
それを理解しているからこそ、亮二も禁忌の愛を退ける言葉を紡がない。
「一つ……訊いていいか？」
数十秒――それとも数百秒経っただろうか。不意に、叔父が顔を上げた。
「お前は……よく、考えたんだな？」
重厚な響きを含んだ短い問いに、ゆっくりと頷く。
「私は、沙羅と違ってあんまり頭は良くないけど……一生懸命、考えたよ」
正答のない難題を前に、昼夜を問わずに挑み続けていた。それが、間違った手法で

あることを百も承知で、何度も何度も繰り返してきた。
「何年も、何年も……ずっと……ずっと、悩んでいたんだよ」
ほんの微かでもいいから、亮二に女として見て貰いたかった。だから、己の身体をちらつかせる性的なアプローチをして、叔父を困らせたりもした。
そんな子供っぽいやり方でしか、想いを表すことができなかった。
「……そうか」
長い一呼吸をおいた後に、亮二がゆっくりと身体を起き上がらせる。涼香は女としては背が高い方だ。それでも叔父が目の前に立つと、自然と目線が上がる。
「あ……」
ぽん、と頭に亮二の掌が乗せられた。
「困った子だな……涼香は」
「……うん。バカな子で、ごめんね……兄さん……」
何年もして貰っていなかった、暖かな愛撫。とっくに成人して身体も大人の女になっているのに、子供をあやすように亮二は頭を撫で続ける。
たったそれだけの児戯に等しい行為なのに、無上の安堵感が心に満ちていく。
「いや――保護者が大馬鹿だから仕方無いさ」

「えっ」と驚きに跳ねた目線が、そのまま強く胸に抱かれる。
そっと身体が抱き寄せられる感触を感じながら、実らないはずの初恋が実を結んだことに涼香は涙を流した。

ピークに達していた緊張感が弾けたのだろう。
最愛の姪は、胸板に柔らかな身体を預け、静かに泣き続ける。
亮二は優しく背を抱き留めながら、涼香の頭をゆっくりと撫でた。
（涼香……苦しかっただろうに……）
胸に封じられていた背理の想いが、涼香の心をどれだけ惨苦に蝕んだのだろう。
苦しみを隠し、いつも笑顔で自分と顔を合わせる。それが、どれだけ姪姉の心を痛めつけていたのだろうか。
（姉さん……俺のやってきたことは、間違いだったのか）
姉夫婦以上の愛情を注いできた。
良き叔父であろうと努力してきた。
自分の中で求めた理想の叔父を体現しようと、己の背中を姪姉妹に見せてきた。

（なのに……涼香が俺に惚れていたら……何もならないだろ）
『兄さん』と呼んで懐いてきた、妹であり娘でもある姪を今日まで大切に育ててきたのは、恋慕を歪曲させるためではない。
（……違うだろ。亮二）
理想的な叔父を求めていた亮二の側面から、別の亮二が厳しい叱責を飛ばす。
（言い訳をするな。涼香に、業をなすりつけるな）
そう――それは、違う。
本当に理想の叔父を貫くならば、絶対に涼香の想いを拒否しなくてはならないのだ。
泣かれてもいい。嫌われてもいい。
それが、姪の将来に繋がるのならば、頬を張ってでも想いを拒絶するべきだ。
（なのに……俺は……）
成長しきった女体の重さが、服の上から温かに伝わってくる。
（姉さん……すまない……俺は……）
ほんの少し腕を緩めて涼香との間に隙間を作る。頭を撫でていた手を細い頤に添えた。姪のなめらかな肌理が、指にしっとりと吸い付いてくる。
「あっ――」

落涙の痕が残る頬が室内灯に照らされる。
（俺は……姉さんと違って、最低の弟だ）
潤いに満ちた紅唇を、そっと自分の唇で塞ぐ。
「んっ……あ、ふ……ん……」
涼香の濡れた唇から、甘く柔らかな口の味が染み渡る。
リキュールの断片が微かに鼻孔を擽った。
（涼香が……姪が、キスで甘えた女の声を零している……）
自分の感想が、肉親として最悪なものであることは重々承知している。
それを自覚してもなお、倫理にもとる行為を止めることができない。
「んっ……んんっ……兄さん……」
ほんの微かに唇を浮かせ、リップクリームの引かれた紅唇を舌先で舐め取る。
いきなり舌を使われたのに驚いたのか、腕に伝う涼香の身体が僅かに強張った。
「ん……あっ……ん、ピチャ……クチュ……」
どう反応すればいいのかわからなかったのだろう。初めはなされるままにされていた涼香だったが、やがておずおずと薄い舌先を絡めてきた。
「チュ……ん、あ……ふ、ぁ……」

舌先を淫らに舐め合い、思いだしたように音を立てキスを繰り返す。
（全然経験が無いのに……一生懸命付いてこようとしているのか）
ぎこちない舌の動きと、喜びよりも戸惑いが大きい唇の震えを感じればわかる。
（大切なファーストキスを……俺に捧げてくれたんだな）
姪の純愛を味わうと、叔父としてあるまじき支配欲が脳裏に熱い火花を散らす。
手塩に掛けて育てた愛し子の思慕を牛耳る、禁断の想いが噴き上がった。
「にい、さん……ん、チュ……はむ……っ……んっ、クチュ……」
マナー違反だが、瞼を薄く開いてキスを甘受する涼香を見やる。いじらしい姪は長い睫毛をふるふると靡かせ、蕩けそうな目尻に歓喜の雫を浮かべていた。
その頬が熱く紅潮しているのは、決してアルコールの所為だけではないだろう。
「うん……は、ふ……ぅ……」
長いキスが終わり、唾液に塗れた唇をゆっくりと離す。
（こんなに瞳を潤ませて……どうして、涼香は、俺みたいな男を想ってくれる）
切なさと歓喜に濡れる双眸を見ていると、恥を知らない自分の欲情に罪悪の楔が打ち込まれる。
「俺は……最低の叔父だ」

「うぅん。兄さんは、私にとって最高の男だよ」
亮二の偽らざる本音に、涼香は何の躊躇いもなく自らを肯定し、叔父を許した。
大切な姪の未来を奪ってしまう、背徳の愛情。叔父としての亮二には断じて認められないが、男としての亮二には深い充足感が充たされていく。
「まったく……姉さんの前で、堂々と忘れ形見を育て上げた――って、胸を張って報告するはずだったのに……これじゃ、滔々とあの世で説教されそうだ」
義兄に至っては、曲がりなりにもプロテスタントだったから、地獄の果てまで追いかけて来るかもしれない。
「ふふふ、頑張ってママからお叱りを受けてね。兄さん」
「おいおい。そこは『私も一緒だから辛くないよ』みたいな、愛を感じられる台詞を連ねる所じゃないのか？」
「だって、私をこんな風に育てたのは、兄さんが原因だもん」
魅惑的なウインクで、非難の視線をさらりと涼香は受け流す。
どうやら、得意の猫被りは両親の前でも遺憾なく発揮されそうな気配だ。
「でも――ね」
柔らかな繊指がするりと首に絡み付き、豊かな双乳が胸板に押しつけられた。

「兄さんが怒られてションボリしていたら、私がいっぱい、いっぱい慰めてあげるよ」

（えへへ……兄さんに抱っこして貰うなんて……何年ぶりかな）
まさか、大人になってから愛しい叔父の膝に乗ることになるとは思わなかった。
昔は何の躊躇いもなく叔父のふとももにお尻を乗せ、ゴロゴロと猫のように甘えていたが、今から考えれば良くあんな恥ずかしいことを平然としていたものだ。
（こうしているだけでも、なんか幸せ）
大好きな男に慈しみを受け、可愛がって貰っているという実感が、長年心を蝕んでいた鈍痛を徐々に癒していく。
「あ……」
不意に、長い黒髪を触られた。
暖かな太い手櫛が肩をすべり、流れた黒い糸を丹念に梳いた。
「涼香の髪は、本当に姉さんゆずりだな」
呟くように漏らされた叔父の声が、露出した首筋をさらりと撫でた。

目に見えない透明な産毛がゾクゾクと震え、身体の芯がキュッと縮こまる。
「どうした？」
「う、うぅん……何でもないよ」
トクントクンと早いリズムを刻む心臓が、微かに声を上擦らせる。
（兄さんの声が肌に触れただけで……身体がゾクゾクしちゃう……）
心地よい痺れが全身に流れ落ち、内股に向かってふとももが窄まる。
「に、兄さんは……私の髪、好きなんだよね」
自分の痴態を覚られないように、慌てて話題を投じた。
「あぁ。こんな綺麗な黒髪なんて滅多にない」
その台詞が嘘ではないと涼香も知っている。自分の髪は女友達との間で頻繁に話題に上がるし、行きつけの美容院に行くたびに異口同音の評価をされていた。
大学生の時、仲良くなった美容師に髪を染めたい相談したところ、宝石にわざわざを亀裂をいれるようなものだと、商売そっちのけで反対されたものだ。
（それに、兄さんも綺麗だって言ってくれたもん）
プロに駄目と言われても諦めきれなかったが、亮二が「涼香の黒髪は、本当に綺麗だ」と言ってくれると、カラーリング意欲はあっと言う間に蹴り飛ばされた

髪を長く伸ばしているのも、その方が栄えると言ってくれたからだ。入浴やトリートメントは大変だが、叔父が喜んで見てくれのならそんな手間は些細なものだ
（ねぇ、兄さん。私、兄さんの好みの女になるために、結構頑張っていたんだよ）
お腹を軽く抱いてくれている叔父の手に、そっと自分の指を重ねる。ちょっと無骨で硬くて――けれど、昔からとても頼もしい手の甲を、指先でゆっくりと確かめた。
「兄さんの手……昔から、大きくて変わらないよね」
「涼香が十歳になった時、俺はもう二十歳だったからな」
もう、十二年も前の話だ。それなのに、叔父の魅力は何一つ色褪せていない。
「涼香は……大きくなったな」
「むー……そこは『綺麗になった』って言って欲しいのにぃ」
子供扱いされたことで、涼香はぷくっと頬を膨らませて抗議する
「綺麗なのは当たり前さ。子供の頃から、ずっと涼香は可愛かったからな」
亮二に可愛いと褒められた途端、火で炙られるような灼熱感が頬に惹起する。
（も、もう……普段は鈍感な癖に……こういう台詞は、ストレートに言うんだから）
嬉しさ余って、今すぐ床の上をゴロゴロと転がり回りたかった。
「ただ、ここの成長は、俺も予想していなかったけれどな」

「ひゃんっ？」
するりと涼香の指を抜けた大きな掌が、腹部から胸を揉み上げた。
「改めて触ると……いや、こいつは本当に大きいな」
「ん……に、兄さん。もしかして、大きいって、おっぱいのこと？」
「いや、だって……男なら……なぁ……」
狼狽気味に言い訳をする亮二だが、指の動きが鈍る気配はない。
（カップからはみ出た乳肉に、兄さんの指が沈み込んでる）
涼香は小さく非難の意を示すものの、心を奪われた異性の悪戯を止める気など微塵もない。
（私のおっぱい……兄さんにも魅力的だと思われているんだ）
自分の大きな胸が、男の視線を集めることは経験的に覚っている。
しかし、幾らバストを強調する挑発的な服装をしても、叔父は保護者的な立場から注意するだけだ。好色な視線を向けられた記憶はない。
それが、理性によってねじ伏せられ、牡の欲望を涼香の眼前に晒さなかっただけだとわかり、込み上げる嬉しさを抑えられなかった。
（兄さんは巨乳が嫌いなのかと思って怖かったけれど……良かった）

女としての見栄えはするものの、日常生活ではデメリットしかない大きな胸。
けれど、最愛の男の色欲を刺激するのなら、この豊かな膨らみに感謝したくなる。
「掌でも全然掴み上げられないな……カップサイズ、いくつだ？」
亮二の指使いによってブラの位置が上下左右に細かく擦れる。繊細な乳房に心地よい痺れがざわめいた。
「ん、ふぁ……え、Ｆカップ……もう、こんなこと言わせるなんてセクハラだよ」
「おいおい、朝っぱらから裸同然でキッチンをうろつくヤツの台詞か？」
「あ、あれは……だって……あんっ」
フッと、亮二の暖かな吐息が耳朶を擽る。胸ばかりに意識を集中していたので、この不意打ちに意図せず甘い声が漏れてしまう。
「はは、涼香は中々敏感だな」
「うぅ～……っ」
何か言い返したかったが、何を言っても墓穴を掘りそうだ。
羞恥を噛みしめ、声を押し殺す。
（それに……本当に、気持ち良かったもん）
涼香の反応に頗る満足したのか、亮二は軟らかな耳朶を唇で優しく噛んでくる。

くすぐったさと性感が混じり合う不思議な感覚が、うなじに鋭い快感を吹き上げさせた。「ふぁん」と、シュガーボイスが喉から漏れる。
（な、何これ……私、耳で感じちゃってるの？）
叔父を想ってこっそり自慰にふける時は、乳首をそっと摘んだり秘唇を遠慮がちになぞる。その二カ所だけしか、強い性感は得られないと思っていたからだ。
それなのに、まさか耳に触れられただけで、ここまで鮮やかな官能を感じるとは考えも及ばない。
（首筋も背中も変だよ……ムズムズして、なんか胸がキュッてされちゃう）
涼香は叔父に抱っこされ、ほんの少しの愛撫を受けているだけだ。
たったそれだけなのに、深い充足感が女体を包み込んでいく。
「ん、はぅ……んんっ、に、兄さん……あんっ……」
オナニーで達した後の、微睡みに似た心地よい陶酔が、涼香の四肢を甘く痺れさせる。湿り気の増した吐息が漏れ、感覚が鈍くなるほど耳が熱くなった。
「……お前、滅茶苦茶に感じやすい体質だな」
「そ、そんなこと無いもんっ」
脊髄反射的に、慌てて亮二の指摘を否定した。自分がエッチでいやらしい身体だと

言われているみたいで、首から上が息苦しくなるまでに赤くなる。
「いや、だって……さっきから、凄く切なそうに悶えているじゃないか」
「え……あ、やんっ」
ブラウスごしに胸を撫でていた人差し指が、スッと伸ばされる。先を見れば、自分で気づかない間に内腿がもじもじと擦り合わされていた。
その動作は露骨なくらいに艶やかで悩ましく、脚をぴったりと覆っているパンティストッキングがむらになるほど力が込められている。
「んっ……あっ……や、だぁ……」
一度意識し出すと、ナイロンのすべすべとした感触が、堪らなく甘美な愛撫へと生まれ変わる。膝から伝った痒みを伴う快感が遡上し、ショーツを貫通して秘部を優しく刺激した。
（あぁ、どうしよう……恥ずかしいのに、止められないよ）
はしたないと理解しているのに、脚の囀りが鳴き止まない。もっともっと叔父に可愛がって欲しいと、女体が芯から切望している。
「変だよぅ……私の脚、止まってくれないよぅ……」
僅かに涙が声に混じる。愛する叔父に淫乱な娘だと見られ、軽蔑されるのは耐えら

れない。せっかく想いが伝わったのに、こんなことで嫌われたくはなかった。
「じゃあ、こうして止めてみよう」
叔父の片膝が潜り込み、するりと涼香の両脚を割る。
「うぅ……駄目だよ……止まらないよ……」
自分自身の内腿が擦り合わされることは無くなったものの、二本の脚は今度は亮二の足を包み込むように圧迫し始める。
（あぁ、駄目なのに……エッチな子だと思われちゃうのに）
下半身そのものが独自の意思を持っているのか、一向に官能のざわめきが収まらない。寧ろ、叔父の足肉の感触を求めようと、次第におねだりが盛んになる。
「どうも駄目らしいな……じゃあ、これならどうだ」
「え……ま、待って兄さんっ。それは……あぁっ」
もう一つ叔父の膝が差し込まれ、グイッと大きく股が開かれる。
タイトスカートが生地の張力に耐えきれず、腰に向かってずり上がった。
「あぁ……兄さんイヤ……こんな格好恥ずかしいよ」
平素は膝を揃えている脚が、大股で開帳させられる恥辱によって声が擦れる。
熱の籠もった股間に外気が流れ込み、ひんやりとした空気がショーツを扇いだ。

〈体験版終了〉